季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM QUARTERLY

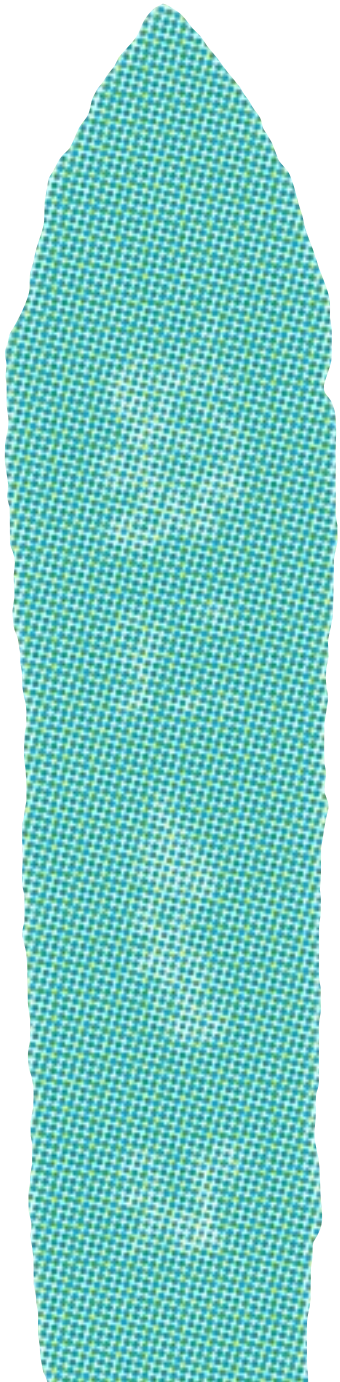
URL http://www.general-museum.fks.ed.jp

69

夏の企画展

発掘された日本列島2003
発掘ふくしま 3

福島県立博物館



金銀象嵌鉄剣
（柳倉町流摩寺跡）

夏の企画展Ⅰ　「新発見考古速報展　発掘された日本列島　二〇〇三」

「新発見考古速報展　発掘された日本列島」は平成八年度から開催されている文化庁主催の巡回展です。この展示は、昨年調査され注目を集めた遺跡を中心に、出土品を全国から集め、わかりやすく紹介するとともに、埋蔵文化財保護行政の現状についても考えてもらうという趣旨で開催されているものです。

昨年も日本中で数多くの発掘調査が行われました。今回、ここに展示される資料はそのなかでも全国的にたいへん注目を集めた調査成果で、約三〇〇〇年前の旧石器時代の石器にはじまり、一五〇年ほど前の洋式銃まで、非常に長い期間にわたる展示資料を集めました。県内関係では、会津若松市にある墓料遺跡から出土した縄文時代晩期の土偶を展示します。

夏休みのひととき、「いにしえとの語らい」へご家族でぜひお出かけください。

○おもな展示資料

・旧石器時代　黒曜石製石器・石器接合資料（北海道白滝村白滝遺跡群）

・縄文時代　土器・土製品・石器（宮城県築館町嘉倉貝塚）

・弥生時代　骨角器・貝製品（鹿児島県笠利町宇宿小学校構内遺跡）

・古墳時代　巴形銅器・木製品・土器・石器（愛知県清洲町朝日遺跡）

・古　代　広形銅戈鋳型・勾玉鋳型・銅製品（福岡市井尻B遺跡）

・中　世　家形埴輪・人物埴輪・動物埴輪（大阪府高槻市今城塚古墳）

・近　世　乳文鏡・土師器・鉄製品（群馬県赤城村宮田諏訪原遺跡）

絵馬・墨書人面土器・人形（大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡）

イスラムガラス・貿易陶磁器（福岡市鴻臚館跡）

陶磁器・焼けた建築部材（和歌山市根来寺坊院跡）

洋式銃・弾・十手（長崎市出島和蘭商館跡・長崎奉行所跡）

夏の企画展Ⅰ

発掘された日本列島　2003

●会期　平成15年7月15日（火）～8月13日（水）

絵　馬
大阪府讃良郡条里遺跡

尖　頭　器
北海道白滝遺跡群

家形埴輪
大阪府今城塚古墳

洋　式　銃
長崎県出島和蘭商館跡

夏の企画展Ⅱ　「発掘ふくしま　3」

「発掘された日本列島　二〇〇三」に引き続き、「発掘ふくしま　3」を開催します。この企画展では、過去五年ほどの間に県内各地域で実施された発掘調査の成果を中心にとりあげ、新たにどのようなことがわかり、どのようなことが問題となってきたかについてわかりやすく紹介します。

○おもな展示資料

・旧石器時代　石器接合資料など（白河市一里段A遺跡　楢葉町大谷上ノ原遺跡）
・縄文時代　人体文土器・狩猟文土器（飯野町和台遺跡）
・弥生時代　墓に納められた石斧・玉類（いわき市平窪諸荷遺跡）
・古墳時代　古墳に納められた豪華な装身具（矢吹町弘法山古墳群）
・古　代　人物墨書土器・人面墨書土器・舟形二面硯（塩川町鏡ノ町遺跡B）
・中　世　かわらけ・石臼（郡山市守山城跡）

調査風景（会津坂下町長井前ノ山古墳）

金銀象嵌鉄剣　棚倉町流廃寺跡

夏の企画展Ⅱ

発掘ふくしま　3

●会期　平成15年8月20日（水）～9月23日（火）

企画展「発掘された日本列島　二〇〇三」関連行事のお知らせ

○記念講演会
日時　七月二一日（月）午後一時半～
場所　当館講堂
演題　「日本列島発掘ものがたり」
講師　文化庁文化財調査官　玉田芳英氏

○展示解説会
日時　七月二〇日（日）午後一時半～
場所　企画展示室
解説　当館学芸員
日時　八月一〇日（日）午後三時半～
場所　企画展示室
解説　当館学芸員

企画展「発掘ふくしま　3」関連行事のお知らせ

○発掘調査成果報告会
「考古学が解き明かすふくしまの歴史」
日時　九月七日（日）午後一時半～
場所　当館講堂
講師　県内各地の埋蔵文化財担当者

○展示解説会
日時　八月二四日（日）午後一時半～
　　九月二〇日（土）午後一時半～
場所　企画展示室
解説　当館学芸員

■企画展《発掘された日本列島　二〇〇三》は平成一五年七月一五日（火）から八月一三日（水）まで、《発掘ふくしま　3》は平成一五年八月二〇日（水）から九月二三日（火）まで開催しています。
■企画展観覧料　一般・大学生五〇〇円／高校生三〇〇円／小・中学生二〇〇円

解説要旨 収蔵資料品展展示解説会

平成一五年四月二六日（土）

「鈴木舜一　鉱物コレクション展」

講師　東北大学名誉教授　鈴木　舜一氏

東北大学を退官するときに寄贈した資料の中から、鉱石関係を中心に展示してあります。博物学では、「動物」「植物」「鉱物」という分け方をしていましたが、最近はあまりこういう分け方をしなくなりました。鉱物とは、天然に産する無機物が主体ですが、有機物の石炭や石油、天然ガスを含めることがあります。

鉱石とは、金とか鉛とかの有用鉱物であり、人間の役に立ち利益になるもので、鉱山から掘り出されるものです。鉱床とは、有用鉱物が取り出せるように集まっているもので、経済性をもって掘り出せるものです。もし、月に金があったとしても、取りに行けなければ、鉱床とはいえません。

金属の値段は、日夜変動しています。金は一グラム、千三百円前後で上下しています。銀は一キログラムで一万八～九千円くらいです。銅は一トンで二十一～二十二万円くらい、鉛は一トンで八万数千円くらいです。松茸は、同じ重さで銀の三倍くらいの値段です。お茶は一トンで一千万円、ササニシキで一トン一千万円ですから、人間は銅よりはるかに高いものを食べていることになります。それに、食物は再生産が可能ですが、金属資源は一度とるとなくなってしまいます。

海底熱水性堆積鉱床とは、海底火山活動による熱水が、深い海底にかかる高い水圧のために、沸騰しないであがって来て、海底に噴き出すもので、熱水に溶け込んでいた金属成分が有用鉱物として海底に沈殿したものです。黒鉱鉱床など、千五百万年も前のもので、会津では横田鉱山や田代鉱山などがそうです。鉱山では、細かくつぶして鉱石を分けることを選鉱と言います。黒鉱鉱床では、いっしょに石膏も出てきます。かつて石膏はセメントの原料になっていました。会津藩の金山として始まった朝日鉱山や石ヶ森鉱山が石膏鉱山として有名で、太平洋戦争のとき、セメントに利用されたためにさかんになりました。

石ヶ森鉱山のきれいな透石膏が展示してありますが、広い隙間で成長したものです。水晶も同じですが、せまい場所で結晶ができはじめると競争しあって大きな結晶に成長しません。人も同じだと思いますが、大きく育てるにはのびのびとした空間が必要です。

重晶石とは硫酸バリウムで、胃の透視のときに飲むバリウムは、鉛や亜鉛を除いた重晶石を精製したものです。

スカルン鉱床とは、石灰岩が花コウ岩質マグマによる熱水と反応してスカルン鉱物というものが沈殿するものです。イタイイタイ病の原因とされた神岡鉱山、磁鉄鉱の釜石鉱山等がそうです。話がとびますが、日本画の絵具に使われている顔料は鉱物質です。白は石英、緑は銅、朱は水銀の化合物です。松島瑞巌寺の絵が何百年たっても、変色せず生々しいのは顔料が鉱物質だからです。

昨年、北海道の大平洋炭鉱が廃坑となり、日本では炭鉱がなくなりました。

料理は温度や時間で味が変わるように、石炭も温度や圧力によって質が変わってきます。

それぞれできたときの歴史を背負っているのです。サラッとしたものは火力発電用に、粘りがあるものはコークス用にと使い方も違ってきます。

最近は、硯に興味を持っています。硯石は、旧藩時代は藩の財源となっていました。岩手県猊鼻渓の紫雲石は三億七千万年前のデボン紀、有名な中国の端渓石は三億八千万年前のものです。自分でも硯を彫ってみて、楽しみながら調べています。

着任にあたって

館長　赤坂憲雄

思えば、この十数年ほどのあいだ、前館長の高橋富雄先生が切り開かれた道を、それと意識することもないままに辿りつづけてきたような気がします。ふと気がつくと、そこに高橋先生の孤高のうしろ姿があり、「東北学」と染め抜かれた旗が手招きでもするように風に揺れていました。それぞれの場所から、それぞれの東北学を……、そう呼びかけられ、励まされている気がしたのは、けっして錯覚ではなかったと信じています。わたしもまた、布きれに手書きで「東北学」と書きつけ、それを幟に携えて、山形の地からわたしの東北学を創るために働きはじめたのです。

それから、十年の歳月が過ぎ去り、この春には高橋前館長のあとを承けて、福島県立博物館の館長という重職を拝命することになりました。まったく感慨無量です。浅学にして非力・非才のわたしに、いったいこんな重大な職務がつとまるのか、むろん不安に駆られないわけではありません。しかし、そうした不安以上に、福島県立博物館という未知なる現場にたいする期待のほうが、大きくふくらんでいます。

この福島の、会津の地から、東北学が豊かに花開いてゆくことには、幾重にも必然があること、あらためて思います。東北学はひとつではありません。東北に生きる人々が、みずからの過去に思いをいたし、その歴史や文化や自然風土を地域資源として再発見し、それを糧として東北の将来像を思い描こうとするとき、そこにはすでに、いくつもの東北学がしっかりと芽生え、根を張りはじめているのです。東北学と名付けられている必要はありません。やがて大河となるかもしれぬ、いまはまだ生まれたばかりの、幾筋もの知の流れにたいして、仮に東北学と名付けているだけのことです。

わたしはいま、むしろ東北学の以前に、地域学のひとつとしての「福島学」や「ふくしま学」を創る必要があるのかもしれない、と感じています。八十年代の半ばから、しだいにみずからの輪郭を明らかにしてきた地域学は現在、全国に二千から三千あると言われています。あたらしい地域の時代を支える理念として、哲学として、また、それを創るための方法や技として、地域学が熱い関心を寄せられているのです。この福島県内にも、広義に地域学にくくられる動きがたくさん見られ、ときには地域起こしに積極的な役割を果たしていることでしょう。地域に根ざし、地域に開かれた博物館としての将来イメージを思うとき、そうした地域学との連携が模索され、たとえば県立博物館が「ふくしま学」の拠点へと育ってゆくといったことも考えられるかもしれません。

かつて、民俗学者の宮本常一は、博物館が知らぬ間に「貧しさの展示場」に堕落することにたいして、警鐘を鳴らしました。せっかく、その村や町や県の歴史・文化・風土の豊かさを知らせるための場として造られながら、それは油断をすると、埃まみれの「貧しさの展示場」と化してしまう、というのです。だから、博物館はいわば細胞分裂と増殖をくりかえし、つねに変容を遂げてゆく時代のただなかに身をさらし、新たな自己の姿を提示しつづけねばならないのです。時代に追い抜かれ、置き去りにされるとき、博物館は知らぬ間に「貧しさの展示場」と化している、ということでしょうか。逆に言えば、大小を問わず、いかに、ほんとうの意味での「豊かさの展示場」でありつづけることができるか、という問いを、とても困難な、しかし、永遠に背負ってゆくべきテーマとして、あらゆる博物館が課せられているのでしょう。

地域や民族や人類の過去をいかに記憶するか、いかに記録するか。それがしだいに、わたしたちが足を踏み入れつつある世紀の大切な公の課題であることが、広く認められるようになっています。たとえば、いかに記録するか、というテーマに関しても、近年の高度な情報化社会の訪れとともに、あきらかに大きな場面転換が起こっています。かつて、たとえば民俗の記録といえば、文字やスケッチが主体でありました。それがいつしか、音声の記録から、写真による静止画像、さらに動きのある映像の記録へと移行してきました。その映像の処理・保存や展示・公開の方法についても、驚くほどの技術革新があり、「デジタル・アーカイヴ」ということが声高に語られています。博物館が文化の記憶と記録にかかる現場であるかぎり、そうした情報化社会の展開に背を向けることはできません。

たくさんの外なる・内なる声に耳を澄まし、たくさんの開かれた議論を重ねるなかに、あたらしい県立博物館のイメージが立ち上がってくることでしょう。博物館は時代のなかにあり、地域のなかにある、思えば、あたり前にすぎる、そんな初心の場所から、わたしはこの博物館での仕事をはじめたい、とひそかに願っています。

博物館を去るの記

前館長　高橋富雄

世の光　地には塩とも　汝よなれと
　のぞみの日日を　ここに送りつ

あなたのところにわたくしが迎えられたのは、昭和六一年（一九八六）四月でした。陽春、草萌ゆる候、希望の船出を目睫の間にして、最終の点検に余念ない頃あいでした。そしてその年十月、残菊の候、錦秋の装いも新たに、あなたは「ふくしま文化元年」の祝福のもとに、開館のあの栄光の日を迎えました。

わたくしは、あの時の松平知事の「文化元年」の祝福の辞を今も鮮明に脳裡に刻んでいます。わたくしのそれからの日日は、その祝福を現実にするためのあゆみでした。

わたくしは、職員のみんなといっしょに、あなたを文化の名にふさわしい殿堂に立ち上げようと、精いっぱいつとめたつもりですが、日暮れて道遠しの感があります。

でも、考えてみれば、文化というのは、「まことに日に新たに、日に日に新たに、また日に新たなるもの」です。「大いなる未完成の日日」のうちにこそ創造があるとも言えるのですから、わたくしは、大いなるなぐさめのもと、この「未完の大器、未完成交響曲」を次期館長に引き継ぐのです。

「未完成」「日に日に新た」というのは、「無限の可能性」を意味します。ただ、可能性は現実でないために、しっかりした理念に導かれていませんと、闇雲になってしまうおそれがあります。西洋にもそういうことわざがあります。“He that walketh in the darkness knoweth not whither he goeth”（「闇夜を歩く者は自分がどこに行くのかわかっていない」）というものです。

わたくしは十七年間、斯の道をつとめてまいりまして、いささか発明するところがありました。置土産に一言二言書きとめておきます。

あなたのお名前「博物館“Museum”の原名が“Museion”「ミューズ（ムサ）の神殿」の意味、さらにそのミューズが、学芸全般にわたる文神・詩神たることは、みんな知っています。しかし博物館の現状は、この原義を忘却し去ったようなマナーリズムの中にあります。「文化」という名の「つくられたもの」（ノエーマ）を展示して、能事畢わるとして、「文化」の第一義たる「つくるここころ」（ノエーシス）を顧みなくなってしまっているのではないでしょうか。

わたくしは、博物館がこの「詩神ミューズの館」の原点に立ち戻るために、ミューズ女神像を、われらの聖なるシンボル・キャラクターに高く掲げ、詩神の殿堂の名にふさわしいムセイオンになることを、わが博物館リニューアル芸術哲学として、再確認するようにしたい―そんなふうにねがっているのです。

わたくしは、管理職館長としては、これということ、何一つできませんでした。ただ一つ慰めとしているのは、開館以来、ずっと金曜講座というのを継続したことです。これは無任所学芸員としての仕事でしたけれども、まわりの人たちはみな「館長ノルマ」とみなしていましたから、その点で、これは「事実上の館長職務」だったのです。

わたくしはこの金曜講座において「ソフトなチャレンジ」を試みたのです。

「博物館学」というのは、これでよいのか。

「学者」という名の人たちの研究・学問は、これで十全なのか。

「郷土史」「郷土学習」というもの、すべてうまくいっているものだろうか。

「生涯学習」「社会学級」「市民講座」。さまざまな形で「学問と市民との対話」がはかられているが、その実効やいかに。

「市民のための学問・教育・文化」についてのこのようなさまざまな問いに対する「共通の広場」としてこそ「ミューズの館」というものもあるのでないか。そうであれば、その「文化の祭の司祭者」たる館長は、そのマツリゴトを「聖職（べんしょく）」として、はじめてその管理の職務も全うし得るのでないか―そんな思いから発足し継続されたものでした。

そこで一番大切なこと。それは「ミニマム・エセンシャルズ」をどう考えるかということでした。歴史として、文化として、その地方学習（じかたまなび）として、一番大切なことを、ズバリ一言（ひとこと）、このテーマで、そのこころとかたちをつくす。そういう心づもりで回を重ねました。

これは理想です。現実は、そうして作成された未来学習のためのパンフレットをＰＲする程度にとどまりました。でも、それが講座の形をとり、四〇〇回近くもとも かく続いたとなりますと、これは何か新しいもののはじまりにはなったと思います。そして今そのおわりについて語って、お別れするのです。

思い出深い十七年でした。長いこと、ほんとうにありがとうございました。

※高橋富雄前館長は、四月一日より名誉館長になられました。

トピックス

新しい講座が始まりました

博物館では、今年度もさまざまな講座を開催します。今回は、新しく始まった通年の講座の内容を御紹介します。

○総合講座

「シリーズ　若松城を歩く―歴史と自然・再発見」

若松城（鶴ヶ城）を共通テーマに、さまざまなタイプの講座を一年を通して行います。野外講座では、城跡の石垣や堀を見学したり、野の花や野鳥を観察します。また、歴代の城主の肖像画や城絵図、城をめぐる稲荷信仰などをテーマに講話を行い、この城について考えるための様々な話題を提供します。

○美術講座「暮らしの中の美術―茶の湯」

美術はもともと暮らしの中から生まれたものでした。お茶、お花はもとより冠婚葬祭、晩酌の楽しみまで、暮らしのいろいろなところに美術は生きています。本講座を通して「暮らし」の中に「美術」を探してみたいと思います。今年度は「茶の湯」がキーワードです。

○特別講座「ふるさとの文学―風土とこころ―」

高橋富雄名誉館長による講演会です。

この他に、好評の歴史講座「古文書入門」や美術講座「福島の仏像」も継続して行っています。

なお詳しい日程などは、「博物館だより」のインフォメーションや博物館ホームページ、毎月発行される「博物館ニュース」をご覧ください。

◎秋の企画展予告

「笑いの想像力
―笑わせるヒトと笑うモノの博物誌―」

「笑い」。みなさんは、「笑い」について考えてみたことがありますか？

この企画展は、みなさんといっしょに「笑い」とは何かを考えてみることを目的とした展覧会です。

私たち人間は、自分の感情を表す一つの手段として「笑い」をもっています。おもしろいとき、私たちは大きな声で笑います。うれしかったとき、自然と笑みを浮かべます。一方、かなしくても無理に笑いをつくることもあります。一言で笑いといっても、私たちは、さまざまな感情や思いを内在させています。

さらに、「笑い」について、もう少し考えていくと、だれもが同じように、同じ時、同じものを見て、同じ状態で笑うわけではないことに気づくはずです。また単に自らが笑うというだけではなく、なりわいとして、あるいは祭りや芸能の場において、他人を〈笑わせる人〉が存在することも見逃すわけにはいきません。

どうも「笑い」は、それぞれの地域や時代によっても必ずしも同じとは限らないようです。それは「人は笑う」というだけではなく、文化と深く関係していることを意味しています。

この展覧会では、縄文時代から現代まで、それぞれの時代で「笑い」が、どのように表現され造形化されてきたのか、あるいは地域によって、どのような「笑い」の特色があったのか、日本人の笑いをめぐる想像力に迫っていこうと思います。

■秋の企画展《笑いの想像力》は平成一五年一〇月一一日（土）から一二月七日（日）まで

■企画展観覧料　一般・大学生五〇〇円／高校生三〇〇円／小・中学生二〇〇円

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「津田得民の仕事―近現代の漆工芸―」
会期　六月三日(火)から七月六日(日)まで
「画題で見る美術―山水画と風景画
憧れの景色・夢の景色―」
会期　七月一五日(火)から八月一七日(日)まで
「浦上玉堂と七絃琴
―文人の愛した音色―」
会期　八月二六日(火)から九月二八日(日)まで

講演・講座

◎美術講座
「福島の仏像32」
講師　当館学芸課長　若林　繁
日時　七月五日(土)午後一時半～三時
「暮らしの中の美術3」
講師　当館学芸員　川延安直・小林めぐみ
日時　八月一三日(水)午後一時半～三時
「暮らしの中の美術4」
講師　当館学芸員　川延安直・小林めぐみ
日時　九月一〇日(水)午後一時半～三時
◎民俗講座
「カラムシの糸づくり」(実技)　要申込
講師　染織工芸家　佐藤美幸さん
山田あかりさん
日時　七月六日(日)午後一時半～四時
◎歴史講座
「古文書入門4　近世④」(実技)
講師　当館学芸員　酒井耕造
日時　七月一二日(土)午後一時半～三時
「古文書入門5　近世⑤」(実技)
講師　当館学芸員　酒井耕造
日時　八月三〇日(土)午後一時半～三時
「古文書入門6　近世⑥」(実技)
講師　当館学芸員　酒井耕造
日時　九月二七日(土)午後一時半～三時
◎考古学講座
「縄文土器をつくろう1」(実技)　要申込
講師　当館学芸員　渡部昌二・関口　功
日時　七月一九日(土)午前一〇時～午後三時
「縄文土器をつくろう2」(実技)　要申込
講師　当館学芸員　渡部昌二・関口　功
日時　七月二〇日(日)午前一〇時～午後三時
「縄文土器つくろう3」(実技)　要申込
講師　当館学芸員　渡部昌二・関口　功
日時　七月二六日(土)午前一〇時～正午
「縄文土器の野焼き」(野外)
(大川河川敷)　要申込
講師　当館学芸員　渡部昌二・関口　功
日時　八月二三日(土)午前一〇時～正午
「大昔の生活を体験しよう」(野外)
(大川河川敷)　要申込
講師　当館学芸員　竹内　浩
日時　八月二三日(土)午前一〇時～午後三時
◎総合講座
「シリーズ若松城を歩く3
城絵図パズルに挑戦」(実技)　要申込
講師　当館学芸員　高橋　充
日時　七月二一日(月・祝)午前一〇時半～正午
「シリーズ若松城を歩く4
鶴ヶ城の野の花」(野外)　要申込
講師　会津生物同好会副会長　大須賀昭雄さん
当館学芸員　古川裕司
日時　七月二七日(日)午後一時半～三時半
◎特別講座「ふるさとの文学―風土とこころ」
「神授の詩―歌人服部躬治」
講師　当館名誉館長　高橋富雄
日時　七月一一日(金)午後一時半～二時半
「とくとこのわれを見よ―若松賤子の英詩」
講師　当館名誉館長　高橋富雄
日時　八月八日(金)午後一時半～二時半
「北越雪譜の風景―雪国の論理」
講師　当館名誉館長　高橋富雄
日時　九月一二日(金)午後一時半～二時半
◎体験講座
「虫かごをつくろう」(実技)　要申込
講師　技術伝承者　阿部吉致さん
日時　八月二日(土)午前一〇時～午後三時
「子どものための草木染め」(実技)　要申込
講師　染織工芸家　山根正平さん
日時　八月九日(土)午前一〇時～午後三時
「昔話を語ろう」(実技)　要申込
講師　語り部　横山幸子さん
日時　八月一六日(土)午前一〇時～正午
「草木染め1」(実技)　要申込
講師　染織工芸家　山根正平さん
日時　九月六日(土)午前一〇時～午後三時
「草木染め2」(実技)　要申込
講師　染織工芸家　山根正平さん
日時　九月七日(日)午前一〇時～午後三時
「おもちゃをつくろう」(実技)　要申込
講師　展示解説員
日時　九月一三日(土)午後一時半～三時半
◎福島県立博物館研修講座　要申込
講師　当館学芸員　南雲　修　他
日時　八月六日(水)午前一〇時～午後四時
◎保存科学講座
「流廃寺跡出土金銀象嵌鉄剣の発見」
講師　当館学芸員　松田隆嗣
日時　八月一〇日(日)午後一時半～三時
◎企画展展示解説会
「発掘された日本列島二〇〇三」
講師　当館学芸員　藤原妃敏
日時　七月二〇日(日)午後一時半～二時半
講師　当館学芸員　田中　敏
日時　八月一〇日(日)午後三時半～四時半
「発掘ふくしま3」
講師　当館学芸員　田中　敏
日時　八月二四日(日)午後一時半～二時半
九月二〇日(土)午後一時半～二時半
◎企画展記念講演会
「日本列島発掘ものがたり」
講師　文化庁文化財調査官　玉田芳英さん
日時　七月二一日(月・祝)午後一時半～三時
◎発掘調査成果報告会
「考古学が解き明かすふくしまの歴史」
講師　県内各地の埋蔵文化財担当者
日時　九月七日(日)午後一時半～四時

実演

場所　体験学習室　入場無料

◎「昔語り」
語り部　横山幸子さん
日時　七月二七日(日)午前一〇時半～正午
日時　九月二一日(日)午前一〇時半～正午
語り部　山田登志美さん
日時　八月三日(日)午後一時半～三時
日時　九月一四日(日)午後一時半～三時
◎「紙芝居」
紙芝居作家　五十嵐邦子さん
日時　八月一七日(日)午後一時半～三時
◎「会津の唐人凧つくり」
技術伝承者　鈴木英夫さん
日時　八月二一日(木)午後一時半～三時
◎伝統技術実演
「只見のあけびづる細工」
伝統技術保持者　吉田貞夫さん
日時　九月一五日(月・祝)午後一時半～三時
◎やさしい展示解説会
＊展示解説員による常設展の案内です。六〇分程度。
七月　六日(日)・一三日(日)・二〇日(日)・二七日(日)
八月　三日(日)・一〇日(日)・一七日(日)・二四日(日)・三一日(日)
九月　七日(日)・一四日(日)・二一日(日)・二八日(日)
＊毎週日曜日午前一〇時半からです。ただし、七月二七日と九月二一日は午後二時から。
＊行事の詳細に関しましては、博物館ニュースやホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

八月二一日(木　県民の日)
九月一五日(月　敬老の日)
＊小・中学生、高校生は、いつでも常設展が無料です。ただし、引率者は事前（一週間前）の減免申請が必要です。

七～九月の休館日

七月　二日(水)・七日(月)・一四日(月)・二二日(火)・二八日(月)
八月　四日(月)・一一日(月)・一八日(月)・二五日(月)
九月　一日(月)・八日(月)・一六日(火)・二二日(月)・二四日(水)・二九日(月)
＊八月九日(土)～八月一五日(金)までは、午後六時まで開館します。（入館は五時半まで）

季刊博物館だより　第69号　2003年6月10日発行　編集・発行　福島県立博物館　〒965-0807 会津若松市城東町1―25　TEL 0242-28-6000　印刷　株式会社アポロ　会津若松市七日町14―7　TEL 0242-22-5139